

日中卓球交流の歴史と 2020東京五輪

一般財団法人 日本スポーツマンクラブ財団・専務理事 木村興治



戦後の1949年に、アメリカの強い後押しもあって、国際卓球連盟に復帰加盟をした日本卓球協会は52年開催のインド・ボンベイの世界卓球選手権に選手を派遣した。そして、現在と同じ7種目中、3種目に優勝し、世界を驚愕させた。

その後の50年代の日本はそれまで強国であった欧州を破り、世界にその力を示すこととなった。日本の活躍を見ていた中国は卓球が中国人に向けたスポーツとして考えたと思われる。また、後述するように政治を含む国際社会との関係でも卓球は重視されるようになったと考えられる。それがピンポン外交と言われる71年、72年の米中交流、日中国交回復に繋がっていったといえる。

1. 中国卓球の現状

中国卓球は世界で圧倒的に強い。日本は若手選手の成長もあり、中国に近づいているが、トップ選手の総合力では差のあるのが現実である。最新の世界選手権での全7種目の優勝、リオデジャネイロ・オリンピック全4種目の金メダル、これが中国である。オリンピックに、卓球が入ったのは88年のソウル大会から。以来リオ・オリンピックまで8回、金メダルは4種目×8＝32個、中国はその90%、29個を獲得してきた。厳しい競争の中、僅かなトップクラスを目指しながら、到達できなかった中国選手たちは世界の様々な卓球協会に受け入れられ、活躍している。

リオ・オリンピックで日本女子は準決

勝でドイツに敗れたが、2人の強い中国選手がいたからである。（日本は3位決定戦で中国出身選手のいるシンガポールに勝ち銅メダル）

因みに、このドイツの2人は世界選手権には出場できない。2007年に世界トップ選手と大陸チャンピオン計16人による女子ワールド・カップが開催された。中国人選手以外は福原愛と韓国の選手であった。これでは、世界の卓球の健全な発展に障害となると考えた国際卓球連盟は翌年、協会を移動した選手で世界選手権に参加を考える選手については、新協会が届け出をすることを義務づけ、そして、20歳以上の選手は受け付けないことを決めた。

19歳以下の選手の届け出までの年数も

定めた。勿論、選手の権利を考え、国際オープン大会への出場は問題なしとした。オリンピックへの出場資格は国際オリンピック委員会（IOC）の独自規定があり、3年間に上居住と国籍である。日本でも、世界代表、オリンピック代表となった中国からの移籍選手がいた。現在も多くの中国コーチや留学生選手がおり、日本の卓球強化に貢献してくれている。

2. 国際卓球連盟（ITTF）とは

ITTFは1926年イギリスで創立された。会長はケンブリッジ大学生で22歳のアイボ・モンタギュー、その後41年間、会長を続けた。オリンピック種目になるまでは、世界選手権での会場内への参加協会の国旗掲示なし、表彰式での国旗掲揚・国歌吹奏がなかった。

現在もそうだが、ITTFへの加盟は国ではなくその地域を統括している卓球協会である。Great Britain（正式にはもっと長い名称）としてIOCに加盟している我々のいうイギリスは、卓球では、England, Wales, Scotland と3つの島が独立して加盟し、世界選手権に参加している。オセアニアからは24の協会が加盟しており、その数は国際スポーツ連盟

として最大の222の協会（国と地域）となっている。また、加盟協会は世界選手権への参加権利があり、国同士で外交がない協会が主催した場合、選手団の入国に困難が伴うこともあるが、すべて実現している。

2010年のモスクワ大会へのロシアが未承認のコソボ選手団に対して、入国ビザを出さないことから、ITTFはロシアから開催権を取り上げると警告した。開催直前、ロシアはコソボ選手団への特別入国書を発給した。日本での開催時も北朝鮮選手団は毎回入国している。これらの規定は創設者、会長のモンタギューの「選手を第一に考えるべきである」という深い思想からITTFの憲章に反映されてきた。

ITTF発足当初から、卓球ではルーマニア、ハンガリー、チェコスロバキア、ユーゴスラビア等の東ヨーロッパが強かったが、世界で優勝しても生活が苦しかったことから、トップ選手はドイツやフランス、イギリス等のクラブや協会と契約し、少しは恵まれた環境でプレーすることにした。しかし、国籍は変えなかった。世界選手権は、国の代表でなく、協会代表であるから、国籍が異なってもよかった。複数の国の選手の優勝チーム、派遣

された協会の国と異なる国籍を持つ優勝選手への国旗、国歌を使わないことが自然であった。素晴らしいプレーはピアニストやバイオリニストと同じで国と関係ないというのがモンタギューの考えであった。彼からは、60年代の世界選手権で金メダルを授与されている。

83年、東京での世界選手権に招待した彼から、卓球への様々な思いと実践を聞くことができた。オリンピックでのナショナリズムが益々強くなる今日において、国ではなく選手とその競技表現を第一にした彼の哲学を今こそ教訓にすべきとは思っている。

3. 中国の国際卓球連盟（ITTF）の加盟と世界選手権への参加

中国は53年にChinese Table Tennis Association (China) としてITTFに加盟した。国際スポーツ連盟への最初の加盟であった。モンタギュー会長のバックアップもあった。台湾を含まない中国地域を統括する卓球組織としての加盟であった。台湾は加盟していなかった。そして、その年の世界選手権に参加している。引き続き世界選手権に参加。56年には東京での世界選手権にも参加した。日

本政府は台湾との関係から入国ビザの発給に苦慮したが、ITTFの憲章への対応と中国が在中国日本軍人の帰還に努力していることもあり（私の推測）、約30人の選手団を受け入れた。その後も世界選手権に参加したが、強くはなく、メダル獲得もなかった。

58年、中国は台湾問題からIOC活動を絶った。中国にとって世界スポーツとの繋がりを考えると、ITTF内に存在することと卓球競技力の強さを持つことは国家戦略としても、必要であったと思う。その頃、国際試合の経験を持つ広州から香港に行っていた選手とコーチを北京に呼んだ。59年からは2年ごととなった世界選手権、ドイツ大会で香港から来た容国团選手が男子シングルスで優勝した。日本は残り6種目に優勝した。そして、ITTFは61年北京で世界選手権を開催することを決定した。当然のことながら、潜在能力の高い若い選手を選抜し、香港から来たコーチの下に、日本に対抗するための徹底した強化訓練が行われたと考えられる。練習環境も十分ではなく、コンクリートの床での練習もあったと後で聞いた。

4. 北京での世界選手権

61年4月、中国は北京で世界選手権を開催した。私は日本代表に選ばれた。20歳で、初めての外国行きだった。香港でビザを得て、列車で深圳に行き、パスポート検査を受け再び列車で広州に到着した。目に入ってきたのは「美国帝国主義打倒」という大きな看板である。聞くと、アメリカを中国語で美国ということだった。ベトナム戦争直前であり、中国は政治姿勢そのものが一般社会で、堂々と表現されている社会と感じたものだ。

しかし、広州の人々の私たちへの温かい心配りを感じた。その後、広州から飛行機で、各地で給油しながら、13時間かけて北京に入った。会場は工人体育館でこけら落としの大会であった。1万5千人入る会場は連日満員で、中国で世界的イベントを行うのは卓球が初めてであり、中国政府・党の要人も連日観戦に見えていた。中国の選手の戦法は日本になかった、日本に勝つためといえる前陣攻守で、率直にとっても新鮮であった。男子団体では決勝で中国が日本を破り、初優勝した。その瞬間の会場内の大きなどよめきは、今でも覚えている。世界からの役員、選手も感嘆したし、日本チームはつらかった。

団体戦後の翌日は休養日であり、出場

選手は万里の長城に案内された。そこでは中国の選手たちはいつも我々のそばにいて、通訳を介して笑顔で話しかけてくれ、我々が試合のことを含む緊張から解放されるよう心配りをしてくれた。選手として素晴らしいだけでなく、人として魅力を感じた。その思いはその後から今日までの交流でも変わっていない。結局中国は男子団体と男子シングルス、女子シングルの3種目に優勝、日本も3種目に優勝、他はルーマニアであった。

閉会式の後、日本選手団11名は周恩来総理から夕食に招かれた。北京飯店であったと記憶している。当時、中国が大使級として処遇していた西園寺公一さん夫妻も一緒だった。8時頃食事が始まり、周総理が立たれ、話をされた。私は空腹でもあり、早く食事をと思っていたが、周総理の我々を見つめながらの話に空腹も忘れ、聞き入った。ホテルに帰ってから、要約したが、それは次のような内容だった。

「中国の社会制度、人民の生活は他国と比べて遅れている。封建的なものも残っている。纏足のような悪い風習もまだある。このような状況を変えるにはスポーツが極めて大切であると考えている。これからスポーツを盛んにしてゆきたい。その中で卓球は中国人民に非常に合っている

ように思う。日本は先に強くなったので、中国は日本に学んでいる。これからは日本と中国で卓球の交流をすべきと思う。これは卓球選手のみならず、交流を通じて両国の国民もお互いを知ることになるのではない。これから、ぜひ両国の協会のリーダーに推進を考えてほしい」。まだ国交のない時代に中国の総理、周恩来さんがこのような話をされたことで、周総理は本当に大きく日本と中国のことを考える方なのだと、青臭い若者の単純な思いだが、それを強く感じたことを覚えている。そして、その話は今でも心に残っている。

5. 1962年からの毎年相互訪問による日中卓球交歓交流

周恩来総理の目指した両国の卓球交流は62年から文化大革命の直前の65年まで続いた。私の訪中は62年と64年であったが、国内の交歓試合には毎年、選ばれた。中国各地での試合と交流、歴史的建造物の見学や農村訪問など濃密な時間であり、中国側の格別な配慮を感じた。日本の選手も中国の一般の人たちとの接触を大事に考え、積極的な交流を続けた。

一方、日本では、右翼が宿泊先や体育

館近くにやってきての音声での妨害があり中国選手には本当に申し訳なく思ったものだった。しかし、どの会場でも、超満員の観客で、中国選手のフェアーなプレーマナーと礼儀正しい態度は、多くの人々に、卓球が強いだけでなく、素敵な選手たちという印象を与えた。私にとっても、61年、63年、65年の世界選手権団体決勝で中国に敗れ、また、この交流試合で何度も中国選手と試合をしたが、試合後のお互いの健闘をたたえた目と目を合わせた固い握手に、言葉は交わさないものの引き付けられる魅力を感じた。

卓球の試合での選手間の距離は4〜5メートル。顔が見え、どんなプレー戦術を考えているか、気持ちの動きはどうか等を感じ取れる距離であり、それだけに試合後の挨拶に気持ちがいこもるのである。選手として、その後卓球の役員として、友人として今日まで交流が続いているのは、この60年代に真剣に戦った4〜5メートルの距離にもあったと思うている。

6. 中国の文化大革命

1966年、中国のあらゆる分野において社会を作り直すという革命ともいえる動きが伝えられた。25〜26歳の頃であっ

た。私も若くスタート時は革命ということに多少共感を覚えた。67年、世界選手権の代表に選ばれ、今度こそ中国に勝つとして研究もし、訓練に明け暮れていた。しかし、突然、4月にストックホルムで開催される世界選手権に中国が参加をしないとの連絡がITTFから入った。私は愕然となった。私は自分の緊張状態を保てる相手がいることで、自分も成長できるといつも思っていたので、大げさかもしれないが、目の前が真っ暗になった。私は監督兼選手を命じられたが、大会では選手としては団体戦に出ず、監督に集りに優勝し、ほっとしたが、一方では、寂しさもあった。

67年後半には、中国の卓球選手が中国から逃亡したのではないかと社会的に価値のあるものが壊されているというニュースが入ってきた。これは何か、おかしいと感じた。新しい社会主義国家へと向かう流れの中で、資本主義的動きに巻き込まれたと見られたので、卓球選手や指導者が批判されているのではないかと思った。そして、香港より呼ばれた容国团選手や監督、コーチがスパイの嫌疑をかけられ、抗議の自殺をしたというニュースが流された。事実だった。国家に貢献を

してきた卓球選手、指導者、関係者がこのような状況下にあるのかと、悲しくなりました。それで、荻村伊智郎さんたちと一緒に、周総理に「中国の卓球戦手はスポーツ界の改革のために全力をつくしているものと信ずる。また、一緒にプレーできることを私たちは待っている」という電報を打った。届いたかどうか分からないが、居ても立ってもいられない気持ちだった。69年の世界選手権にも中国は不参加であった。

文革も落ち着いてきたと思われた70年11月、翌月開催されるストックホルムでの国際大会に中国が参加するという報道があった。うれしかった。私は翌年、71年名古屋での世界選手権のために選手強化の責任者を務めていたこともあり、日本は選手を派遣していなかったが、視察も兼ねて見に行った。本当によく戻ってきてくれたという気持ちで一杯だった。でも馴れ馴れしいことはできないので、2階席から中国選手と目と目を合わせるだけであったが、それで十分だった。

7. 1971年名古屋での世界選手権

3月末の大会を前にして、中国の参加がはつきりしなかった。そこで、2月、日

本卓球協会の後藤会長は日中文化交流協会の幹部を伴って、名古屋への参加要請をするために訪中した。時間が経つ中、周総理との面会が実現し、その後日中の関係部門の責任者が会談紀要に署名をして、名古屋への中国選手の参加が決定した。

紀要の内容は、「アジアの卓球組織をITTFの憲章に基づき、整頓する。中国敵視政策を実行しない。二つの中国を作る陰謀に加担しない。中日両国の国交正常化を妨害しない」であった。当時、私は日本代表選手選考に関わる意見の違いから強化責任者を辞任していたが、大会では、雑魚寝するような部屋に泊まり、試合を全部観戦した。中国選手からは何度も声が掛かり、ホテルを訪ね面談し、再会を喜び合った。

そして、大会の後半のある日、世界を驚かすニュースが発表された。「大会後アメリカの選手団を中国に招く」というものだった。

大会期間中、アメリカの選手が間違っ

られないが、荘選手は訪日前に周総理に言われた「友好第一に考えなさい」を実践した。後で、荘は毛沢東主席に卓球も強いが政治的意識もしっかりしていると

言われ、体育大臣になっている。選手団は大会後、日本の各地で市民とも交流をし、好印象を残し帰国した。「小さい球が大きな球、地球を動かした」ともいえる名古屋大会であった。72年5月にはニクソン大統領が訪中し、米中の交流が始まった。

8. 1972年9月29日の日中国交正常化の直前に招待され、訪中

72年7月田中角栄総理が誕生した。頭越しのアメリカと中国の交流が動き出し、田中総理は中国との正常化は急務と考えたと思われる。9月初旬、整頓された新組織・アジア卓球連合による第1回のアジア卓球選手権大会が北京で開催された。それに合わせて、中国体育運動委員会より日本卓球協会の老(OB、OG)卓球選手11名が招待された。先輩たちが殆どであったが、私は団長に指名された。広州からの飛行機が遅れ、北京着は9月1日の早朝2時、乗務員より少し機内で待つてほしいと言われた。先に日本政府の関

係者が降り、静かに車で走り去った後、我々が降り始めると、タラップのすぐ近くで、中国対外友好協会の責任者や60年代競い、交流のあった多くの老卓球選手たちが並んで拍手で出迎えており、また花束を持った女子学生たちが「熱烈歓迎」と、声を出してくれていた。中国側が私たちの訪問をいかに大事に考えているかを強く感じた。それは、その後の各地訪問でも同じであった。卓球選手権の一部観戦や、日中の老選手による卓球を深めるための座談会、要人の方々への招待お礼の訪問もあった。

行動の主体は我々の要望も入れてくれた各地訪問であった。北京の他、7つの都市を訪問し、関係者との懇談、卓球の交流試合、市民との交流を行った。延安行きは天候により、飛行機の降り、飛びが狂うことがあると心配されたが、我々の主張を聞き入れてくれた。毛主席の4つの旧居を見学し、当時使用されたままの机と椅子があり、座り、そこで記された「実践論」「矛盾論」「持久戦論」などに思いを馳せた。また、旧居の1つには卓球台もあった。実際に、当時プレーもされていたそうである。

南京では、日本軍国主義の残虐行為の話を知りたいと申し出た。先方は驚かれ

たが、国交正常化前の今、我々はスポーツ人である前に日本人であり、聞かなければならないと考えた。担当の方は、「中国側の史実を基に話します」として、約1時間、静かな声で話してくれた。背中を冷汗が流れた。その夜の歓迎会では私たちを気遣って、年に1度しか咲かないと云われるタンホアの花を用意してくれた。

29日の香港からの帰りの飛行機内の新聞に田中総理が毛主席、周総理と握手している写真が載っていた。感無量であった。私たちは中国に入国してから帰国するまで、日々の行事や各地訪問の内容、感想を皆で話をしながらメモしてきたので、それを「中国を訪問して」と題する報告書にまとめ出版し、お世話になった中国の関係部門と日本の関係者に送付した。

9. その後の日中卓球交流

今年は日中国交正常化45周年となる。政治・経済の深耕が進んでほしいと思うが、それ以上に大切なのが民間の文化・スポーツ・一般の交流である。この面での更なる進展が必要だ。

卓球では、1992年の正常化20年時から、5年ごとに日中の姉妹都市の中学

生卓球選手で1つのチームを作り、他姉妹都市チームと対戦する「日中友好都市卓球交歓大会」を中国側の温かい支援の基に北京で開いてきた。日本側の選手、役員で600〜700人となる。政治的問題にぶつかり、開催が危ぶまれたこともあったが、中国側の強い配慮で継続してきた。今年も6回目が8月に行われる。将来を開く若い両国の選手たちの闊達な交流を期待している。

2006年は1956年に中国卓球選手団がスポーツ交流として、初めて来日してから50周年となることから、北京で両国老卓球選手による記念交流会が行われた。中国側は、日本側の顔ぶれを見て、外国にいる元選手も呼んでいた。56年の東京で対戦して以来、顔を合わせていない人同士の涙の再開など、熱い交流となった。我々の滞在中の動きは中国CCTVでも放映された。

07年は国交正常化35周年を記念し、両国老卓球選手による上海と東京他都市で、一般市民を含む交流が行われた。

08年、当時の中国胡錦濤主席は当時の福田総理と共に早稲田大学で講演をされた。その直後、別の場所で開催されていた卓球台の前で、オリンピック・世界チャンピオンの中国王楠選手と福原愛選手が

練習しているところへ、入ってこられた。シナリオ通り2人の選手がプレーしましうと声を掛けた。胡主席は、待ってましたとばかり、上着を取り、秘書にラケット（マイラケット）と言い、メガネを取って福原選手とラリーを始めた。私から見ても相当にやりこんだ貯金のあるプレーで強いボールを次々と打っていた。それを見た福田総理は、私は結構と辞退された。プレー後、福原選手を傍に招いて話した言葉を私はいまでも忘れない。

「あなたは私のことをあまり知らないでしょう。しかし、私はあなたのことはよく知っている」であった。福原選手は少学4年の時から中国での度重なる訓練、中国チームの一員として国内対抗戦に参加するなどの結果、東北なまりであるが流暢に中国語を話すようになり、多くの中国人に愛され、今日に至っている。彼女の自然な中国との交流姿勢に、見ても心地よさを感じる。日中卓球は、これからも若い人たちに引き継がれ、福原選手のような気負いのない自然な交流が続いていくと思う。私も年齢が高くなってきたが、今年は日中国交正常化45周年という記念すべき年でもあり、中国との交流をこれからもバックアップしたいと思っている。

10. 2020東京オリンピック・パラリンピックへの期待

日本選手の活躍で言うならば、5競技増え、開催国としての参加枠増もあり、リオ・オリンピックの金12個、メダル数41個を大きく上回るのは必然と思う。卓球では、特に女子で10代の才能・実績・成長の伸びしろのある選手が多く、今までにない中国との対抗になれると思っている。全般については、私が思うに、来日した選手、役員、観戦者等にベストを尽くしていると感じてもらえる街並み、一般市民やボランティアの対応、競技運営、選手の移動、選手村の食事を含む温かさ等を用意することが大事ではないかと、また、メダル獲得へのナショナルチームが強くなっている今日、選手間でナショナルリズムを超えたフェアなスポーツマンシップと人間交流を見たいとも思う。それと日本にとって、大事なことは、のちのちまで継続するレガシーだ。2020に向けて努力をした選手が引退後、低料金（これが大切）のもと、地方大学・大学院等で将来の指導者、研究者等に進む道を用意してほしいと願っている。選手であった人の中からそのような挑戦者

が出てきて、2020を通じて専門性を深めた新しいスポーツリーダーが誕生してほしい。彼らは勉強しながら、休日などに地域の子どもたちや中高齢者へのスポーツ指導をすることによってスポーツによる地域創生に、また、スポーツ浸透による国家的課題である医療費削減にも結び付けられると考える。

（2017年3月2日・公開フォーラム）

講師略歴（きむら こうじ）

1940年秋田市生まれ。63年早稲田大学法学部卒業。同年ゼネラル石油（株）入社、総務部秘書課長、人材開発室長、人事室長を歴任、99年退職。1968年早稲田大学体育局講師、2011年退職。現在、公益財団法人日中友好会館評議員、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会評議員、一般財団法人日本スポーツマンクラブ財団専務理事。主な競技歴、1961年から4年連続世界卓球選手権出場、男子団体、男子ダブルス、混合ダブルスに優勝。61年、64年全日本シングルスチャンピオン。